

アトリエ 琉游舎 だより 125号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2022年2月23日発行

雪待ち春に水雨

- 天気が周期的に変化するようになりました。春の訪れが近くなった証拠です。翌日の天気が雪や雨の予報の時は道路の凍結具合が気になります。辺り一面真っ白の時だけでなく、雨に濡れて気温が下がった朝はタイヤが滑らないようにいつも以上に慎重な運転が必要です。
- 2月の後半から3月の初めまでを二十四節気の「雨水」と言います。降る雪が雨に変わり、雪解けが始まるという意味です。どの地方が基準の言葉かわかりませんが、関東平野北端の境界に位置するこの地にも当てはまる言葉です。ひと雨ごと、ひと雪ごとに春が近づいてきます。
- 1月頃の雪はなかなか融けることはありませんが、雨水の頃の雪の翌日はたいがい晴れの天気です、すぐに雪も融け気温も高め、春の訪れを少しだけ実感できます。そんな雨水の頃の雪を私は春待ち雪と呼んでいます。雨になると春に向かって前進、雪になるとちょっと後退。
- 一進一退の雨水の頃の春待ち雪。季節の変わることが待ち遠しい雪も、あと1ヶ月もすれば「名残り雪」と呼ばれるはずですが、♪なごり雪も降る時をしるのは、春が出会いの季節であるとともに別れの季節でもあるからでしょう。コロナ禍の季節と別れる日は近いでしょうか。
- 今朝、山からの吹き下ろしの風で雪がうっすらと積もっていました。そこを今年初見参の狸がヨタヨタと早朝散歩をしていました。冷え込みがなく朝の太陽の光の暖かさに、つい待ち切れずに巣穴から出てきたようです。しばらく眺めているとやっと私の視線に気づき、慌てて落ち葉溜りの中に身を隠しました。今朝の雪は狸にとっても春待ち雪だったようです。
- 敏捷にも強うそうにも到底見えないあの狸は、車にも轢かれず天敵にも襲われず、来年の春待ち雪を見ることができるとか、ちょっと心配になる雨水の頃の春待ち狸の点描でした。

2・3月スケジュール			木	金	土	日
月	火	水	24	25	26	27
28	3月1日	2	3 映画会 13時半	4	5	6 写経会 13時半
7	8 読書会 13時半	9	10 映画会 13時半	11	12	13
14	15	16	17 映画会 お休み	18	19	20
21 彼岸会法要 10時半	22 読書会 13時半	23	24 映画会 13時半	25	26	27
28	29	30	31 映画会 13時半	4月1日	2	3 写経会 13時半

春の彼岸会法要
3月21日(月)
10時半から

写経会
3月6日(日)
4月3日(日)
13時半

読書会
3月8・22日(火)
13時半

3月17日(木)
映画会
お休みします

薄暗い朝の6時過ぎ、いつもの日課でコリーナの蓮池の横を私が通ると鴨が十羽ずつくらの群れとなり一斉に飛び立ちます。いくつかの家族が固まって夜を過ごしていたのでしょうか、私の登音が鴨の安息を妨げてしまったようです。といっても池から飛び去るわけではなく、同じ池の私から離れた氷の張っていないところにまた舞い降ります。その群れに横着な鴨が1羽あって、泳いで私から遠ざかろうとするのです。ところが途中の氷に躓いて前に進めず慌ててバタバタと飛び上がり、遅れることわずかでまた群れに舞い戻り悠然と泳いでいるのです。何とも微笑ましくユーモラスな光景ですが、あの氷の躓きが横着な鴨の生死を分ける致命的な遅れになることもあると、当の鴨自身が気づいているか心配です。私が狩人でなくて幸いでした。

うっすらと雪が積もった2月のとある早朝は、厳しい冷え込みもなく朝から太陽も顔を出し、穏やかな日和の朝でした。あたり一面真っ白な雪の中、焦げ茶色の生き物が私の目の前を通り過ぎて行きます。狸です。猫はこの距離であれば、一度立ち止まり私を値踏みをするや踵を返して逃げていくほどの近さですが、この狸は私がスマホのカメラに収めようとするときまで気づかずにいました。網を投げたら捕らえられる距離です。もちろん私は猟師ではないので、かの狸も慌てて自分の巣穴に逃げていくことが出来ましたが、この危なっかしい行動が彼個人の能力の故か、狸という種が持つ属性なのかは分かりません。しかし猪も鹿も狐もハクビシンも住んでいるこの山で、あまりにも無防備なあの狸が生き抜いていくことは困難なことでしょう。

コリーナをくまなく歩いていると様々な生き物やその痕跡に出会います。その生き物たちは自然の摂理と種の本能に従い、おそらく人間を一番の天敵とみて持てる能力の限りを尽くして生きています。ですから私の目に映る生き物のほとんどは毅然にして、用心深く人目に姿をさらすことなく、私たちの手の届かないところで生きています。空を飛ぶ鳥と池を泳ぐ魚以外は白昼目にする生き物は犬と猫と人間以外いないのです。自然の摂理に従って生きてる生き物は空中か水中かあるいは夜間に活動しているからです。この地のような社会的な生き物と自然の生き物が交わる場所では、人間は両脇に犬と猫を従えて自然の生き物の必死の毎日を他人事のように楽しく眺めていれば、それが自然と共棲することだと思えてくるのでしょうか。

今では野生の生き物も保護される立場にありますから、人間が生きていくために彼らを捕えて食べるということは基本的にはありません。苦勞して彼らを襲わなくても食料をえる方法はいくらでもあるからです。とはいえ、人間の方からも襲ったりしないから仲良くしようねと語りかけても、何万年にも渡って人間に襲われた記憶がDNAに深く刻み込まれている彼らは、そう簡単に人間に胸襟を開くはずがありません。人間が共棲と思っているだけで自然からすれば未だに人間は恐ろしい破壊者で殺戮者です。彼らは共棲という勝手な幻想を押しつけないでくれ、人と関わりない所でひっそりと生きさせてくれと思っているはずなのです。

仏教用語に「不可思議」があります。不思議のことです。「思議すべからず」と訓読され、仏や菩薩の神通力や行為のように、言葉や思慮の及ばない境地を意味する言葉です。転じて今では人間の判断力では及ばないことや常識で理解できないことが「不思議」の一般的な用法です。この「不可思議」の辞書的説明では誤解を招いてしまいます。仏や菩薩という擬人化された存在が超能力（神通力）をもって世の中を動かすようなイメージに聞こえてしまうからです。「不可思議」は人智では説明のできない、大いなるもの、仏の慈悲、宇宙の真理、自然の摂理、縁起の法則、真如、空、ありのままということ。私たちは不可思議（仏）の光の届く処はどこであろうと自然と共に生きること（共棲）ができます。それがありのままに生きるということです。一方神（絶対神）から自然を支配する権限を与えられていると思込んだ人間たちは、その権利を自然の搾取や破壊に使ってきました。それが文明の進歩、科学の力です。その根底にはすべての宇宙の現象は「思議」できるという思想があるのです。全能の神が創造した宇宙の支配権が自分たち人間に委ねられていると思込んだ傲慢な思想です。世界は不可思議であると観る私たち仏教徒は、何でも思議が可能と思込んでいる彼らを増上慢と呼びます。何も悟っていないのに悟っていると思込んでいる人達のことです。思議できることは言葉で論理的に説明できるということです。言葉が不可思議な現実と矛盾することになる度に、思議できる言葉と論理を編み出して説明し続けなければなりません。この永遠にやすらぎのない増上慢の思想は何の土台もない思議の楼阁に屋上屋を重ねていることに過ぎません。彼らのいう環境保護や動物愛護の考えは屋上屋を重ねた上でくるくと回る風見鶏のようなものです。私たちは、自然と同じ不可思議の光の下で生かされている存在と知ったとき、氷に躓いてバタバタ飛び立った鴨や、ヨタヨタと目の前を通り過ぎた狸の先祖たちが、私たちの命を今日まで繋いでくれたことを初めて知り感謝することができるのです。

歎異抄の中で親鸞は「念仏には無義をもって義とす、不可称・不可説・不可思議のゆえに」と語っています。念仏者は「念仏」を阿弥陀仏のはからいといいます。仏教の徒であればお釈迦様の教え、真如、空、などと置き換えられる言葉です。私は「ありのままに観る」といいます。「念仏は分別や理性では理解しえないこと（無義）」という理解が正しい理解（義）なのです。何故なら口で言うことも言葉で説明することもできない不可思議なものだからです。人間の思議（理性）では到底理解できるものではありません。」このように親鸞は語っています。この言葉は思議を重ねた末に不可思議へ到達した言葉です。

理解することが智慧の営みとすれば、その究極は不可思議だったのです。 「信行」一筋の私に「智慧」からもやすらぎの処（不可思議）へ歩む道があると示唆してくれた、あの横着な鴨と無防備な狸に私は合掌いたします。